



日本宣教ニュース

NO. 13 2018年9月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」（コロサイ1：6）

【巻頭言】

「2025年問題とキリスト教会」

日本宣教リサーチ 柴田初男

1. 2025年問題

『平成29年版高齢社会白書』によれば、我が国の総人口は長期の人口減少過程に入っており、平成28（2016）年10月1日現在では、1億2,693万人となっている。その中で、65歳以上の総人口に占める割合（高齢化率）は、昭和25（1950）年には5%に満たなかったのが、現在では27.3%に達し、諸外国に例をみないスピードで高齢化が進んでいる（内閣府『平成29年版高齢社会白書』）。

そして、高齢者人口はさらに増え続け、戦後のいわゆるベビーブームに生まれた「団塊の世代」が75歳以上となる2025年には75歳以上の後期高齢者は、全人口の18%を超え、65歳以上の前期高齢者を含めた高齢者は、30%を超えると見込まれている。

すなわち2025年には、人口の3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上となるということである。その結果、厚生労働省の推計では、在宅医療を受ける人が100万人を超えることになり、今後、在宅医療体制の整備や介護・医療費等社会保障費の急増、その他の課題にどう取り組むかが大きな問題となっている。これが「2025年問題」と言われるものである。

このような「超高齢化社会」の到来とともに、年間の死亡者数も年々増え続け、2016年の約130万人が2025年には約150万人に増えると推計されている。現在では約8割が医療機関で亡くなっているが、施設でもみとれる体制を整えなければ病院のベッドが不足する恐れがあり、また火葬場や霊園の対応能力も追いつかないということにもなりかねず、「多死社会」が本格化することへの備えも必要とされている。

このように、私たちの日本社会は、何気なく生きている中ではなかなか気づきづらいが、大きく変貌しつつあるということが言える。

2. キリスト教会の現状

現在、日本のキリスト教会の数は、カトリックが約1,000、プロテスタントが約8,000で、信者数は、カトリック約45万人、プロテスタント約57万人、オドックスの1万人を加えて合計103万人となる。このようなキリスト教会においても、少子・高齢化の波は否応なしに押し寄せている。いや、一般社会以上に、教職者や信徒の高齢化の影響は著しいとさえ言える。ちなみに、教職者の年齢構成で言えば、2009年の調査では平均年齢が61.6歳であったが、2015年の調査データでは67.8歳となり、また、70歳以上が48%近くを占めていることから、教職者の高齢化が急速に進んでいるとともに、若返りが図られていない現状が伺える。

一方、信徒の年齢構成はどうかというと、そのようなデータを取得している教団が少ないため、日本基督教団の2014年度のデータを見ると、平均年齢が62.9歳、70歳以上が40%を占めており、一般社会の65歳以上の高齢化率27.3%と比べてみても、教職者、信徒とも高齢化が極めて顕著であることが分かる。日本基督教団では、このまま進んでいくと教団の存続にも深刻な影響を与え

るものと危惧されている。しかしながらこのことは、教団によって年齢構成には多少の相違があるとは言え、単に日本基督教団だけの問題ではなく、日本のキリスト教会全体が抱える問題であると言えるのではないかと思う。

3. 日本宣教の課題としての「葬儀」

上記のような「人口減少社会」「超高齢社会」「多死社会」の到来とともに、キリスト教会の伝道力（受洗者を産み出す力）の低下が相俟って、召天者が受洗者の数より上回る事態となり、クリスチャン人口が自然減に陥る危機的な状況に陥っている。そのため日本宣教全体を考えた時、キリスト教会（特にプロテスタント）における「教会の活性化・再生」「次世代育成」は急務であり、牧師の高齢化による引退や継承者不足による無牧・兼牧教会の増加や教会員の減少による維持困難な教会の増加等により、教会の統廃合や、従来からの1教会1牧師制による教会統治のあり方、複数牧会等教会の形態の見直し等が大きな課題となっている。

そうした日本宣教における課題の一つとして、「葬儀」に対するキリスト教会の取組みの問題もあげられるのではないかと思う。

日本においては、歴史的に仏教が祖先崇拜を軸とした血縁社会に対する宗教、神道がムラ社会等の地縁社会に対する宗教としての機能を果たしてきた。しかし、現代の日本社会においては、血縁・地縁関係が薄れ「無縁化社会」が進み、閉塞した社会状況にある。そのような状況の中で、日本人の多くは、葬儀儀礼における仏教の教義に対して無知で無関心であっても他の選択肢がないために仏式で葬儀をせざるを得ないのが現状であり、また、キリスト教に好意を持ちつつも、仏教的な祖先崇拜やお墓の問題等が阻害要因となって、仏教から離れることができない人も少なくはない。

「寺院と葬儀に関する一般人の意識調査」によれば、日本人が宗教に対して求めている役割としては、「精神的なよりどころ」が70.8%と最も多いが、「冠婚葬祭に必要なもの」34.7%、「死への不安を和らげるもの」28.6%、「家族などを亡くした悲しみを和らげるもの」26.7%等、葬儀に関係する宗教的ニーズが大きいことが示されている。また、「信仰する宗教があることは、死に直面したときに心の支えになると思うか？」との問いに対しては、「そう思う」が26.3%、「まあそう思う」が44.3%と約70%以上の人肯定的な回答をしている。

しかし、「あなたが治癒の見込みがなく、死に直面したら、お坊さんが心の支えになってくれると思うか？」との問いに対しては、「そう思わない」32.0%、「あまりそう思わない」42.6%と、70%以上の人否定的な回答をしている。

このような日本人の宗教的ニーズに対して、キリスト教はどのように応え、どのような役割を果たしていったらよいのだろうか。

地域の人々の宗教的ニーズに応え、真の慰めとなる葬儀を行って血縁社会に寄り添うこと、或いは超高齢社会が進む中、教会が地域の福祉的なニーズや精神的・霊的なケアを必要とする人々の「全人的なニーズ」に応える働きを果たすこと等によって地域の中に浸透し、喪失された地域共同体や「会社」、「家族」に変わる新たな共同体を形成していくことが、今の時代に必要とされているのではないだろうか。

それは、そのような愛と憐れみに基づく神の家族としての共同体（コイノニア）を形成する努力を地道に積み重ねることが、キリスト教が真に日本の地に文脈化し、「日本の宗教」になれるかどうかを左右する鍵を握っていると言えるのではないかと思うからである。現状、未信者に対する葬儀への対応については、各宗派・教派によって考え方の差異が認められるとともに、プロテスタント教会においては、個々のキリスト教会の対応はまちまちなのが実態である。

しかしながら、キリスト教会が地域に開かれた教会として、未信者に対してもその公共的・福祉的な働き（ディアコニア）の一環として葬儀を執り行うことを通して、全ての人に開かれた「キリスト教葬制文化」の確立を、キリスト教会全体として取り組んでいく責務があるのではないかと思う。そしてそれは、現代の日本のキリスト教会に与えられている大きなチャンスであり、またチャレンジなのではないだろうか。

【「[終活]Style (Vol. 1 創刊号)」((株)創世 ライフワークスメディア出版社、2018年5月)から転載】

【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、7月19～21日に、TCU FCCを会場に「日本宣教におけるキリスト教葬儀」－未信者に開かれたキリスト教葬制文化を目指して－をテーマとして開催された「第一回実践神学講習会」のレポートを掲載いたします。また、『中外日報』のオンライン情報から、記事を転載させていただきます。

【第一回 実践神学講習会レポート】

「日本宣教におけるキリスト教葬儀」 －未信者に開かれたキリスト教葬制文化を目指して－

「日本宣教におけるキリスト教葬儀」－未信者に開かれたキリスト教葬制文化を目指して－をテーマとした「第一回実践神学講習会」が、7月19～21日、東京基督教大学（TCU）国際宣教センター（FCC）にて開催された。主催したTCU「キリスト教葬儀研究会」では、この度3年間に渡る研究の成果を『FCCブックレットNO.10』としてまとめ出版したが、それらの論文をもとに、執筆者であるTCU副学長で神学部長の大和昌平氏、同大大学院教授の稲垣久和氏、TCU FCC所長の倉沢正則氏、FCC日本宣教リサーチの柴田初男氏、同大准教授の篠原基章氏、日本同盟基督教団・土浦めぐみ教会主任牧師の清野勝男子氏、ライフワークス社社長の野田和裕氏の7名が、それぞれ講習会の各セミナー講師として講演を行った。参加者は、教職者や教会役員等、全国から20名が参加した。

主題講演では、大和氏が「日本人の死生観とキリスト教葬儀」と題して講演を行った。大和氏は、伊丹十三監督の「お葬式」、滝田洋一郎監督の「おくりびと」、そして砂田麻美監督の父親が亡くなるまでの記録映画「エンディングノート」の3本の映画を通して、現代日本人の死生観と葬儀のあり方について語った。

「仏式葬儀が一般的になったのは、死者を『怨霊』と考える日本人にとって、その霊を鎮めるための呪術力が必要だったからで、それを仏教に期待した。従って、葬儀では僧侶の呪文しか聞こえないのが仏式葬儀。キリスト教葬儀では、牧師の言葉はすべて意味をもって伝わる。一人の人のいのちと人生が大切に扱われ、いのちを与え・取られる創造主を仰ぐ宗教心がストレートに参列者の心を打つ」とキリスト教葬儀の現代日本における意義を強調された。

続くセミナーでは、最初に日本宣教リサーチの柴田氏が、「葬儀の意義とキリスト教の取組み」と題して講演を行った。柴田氏は、日本の葬儀の歴史と死生観の概観や仏教各宗派の葬儀に対する意味づけを述べるとともに、一般葬儀の現状と最近の動向、今後の葬儀のあり方について各種調査機関によるアンケート調査のデータ等から説明した。また、キリスト教式葬儀の現状については、キリスト教葬儀社に対して行ったアンケート調査結果から、その現状を特に未信者に対する葬儀の現状について説明を行った。そして、今後の課題として、「キリスト教会が地域に開かれた教会として、未信者に対してもその公共的・福祉的な働き（ディアコニア）の一環として葬儀を執り行うことを通して、全ての人に開かれた『キリスト教葬制文化』の確立を、キリスト教会全体として取り組んでいく責務があるのではないかと述べた。

次に、セミナーⅡでは大和氏が「日本の葬送儀礼の宗教的背景」と題して講演を行った。大和氏は、葬儀の変容の著しい現代日本における「葬式仏教」の宗教的背景を、インドの仏教哲学の影響による無常観、インド仏教が中国の儒教の根底にある祖先崇拜儀礼により変容され、位牌を重んじる呪術的な死者儀礼が禅宗によって日本にもたらされたこと、そして、日本においてはさらに宗教混淆的な展開と江戸時代の檀家制度などによって「葬式仏教」が

定着したが、「葬式から法事にいたる葬送儀礼に影響を与えてきたのは、中国の儒教のもつ祖先崇拜という宗教性である」と述べた。そして「今後、日本人がどのような葬儀を行っていくのかは、日本の宗教において重要な問題であり、そこにキリスト教がいかに関わっていくかは、日本宣教の重要な課題である」と述べた。

セミナーⅢとして、野田氏が、「葬儀・終活から日本宣教を考える実践セミナー」－教会における終活フル活用術！－と題して講演を行った。野田氏は、2006年に葬儀社を設立し、葬儀を通して主に仕え、教会に仕える働きを行ってきた。その傍ら、終活に対する意識が余りに低く、何も準備していない教会が多いことから、全国400箇所で開催してきた。今回のセミナーでも、教会における終活の活用法や実践的なポイントについて、具体的な資料をもとに講演を行った。

翌日20日のセミナーⅣとして、篠原基章氏が「近代日本における死者儀礼と教会」と題して講演を行った。篠原氏は、日本における先祖供養、死者儀礼に対し、日本の教会はどう理解し、関わってきたかを「拒絶型」「受容型」「容認型」の類型に分けてそれぞれの評価を行った。そして、それらの課題を乗り越える第4の道として、聖書の光によって拒絶すべきもの、受容すべきもの、容認すべきものを批判的に選択し、必要に応じて機能的代替していく「選択対決型」アプローチが必要であるとして、選択する際の聖書的原則を提示した。そのようなキリスト教世界観に立って日本の教会が、新たなキリスト教葬制文化を生み出すことが必要であると述べた。

セミナーⅤとして、稲垣氏が「葬儀論から日本宣教論へ」と題して講演を行った。稲垣氏は、教会が内輪の内向きの交わりに終始し、一般の人々の日常生活に触れようとしない在り方から脱し、親密圏から公共圏に向けてキリストのメッセージを発信すべきとして、福音は生きる意味の回復であり、福音の内容を包括的に神の国論として把握する必要性を説かれた。そのような観点から、死の問題も私的な問題であると同時に公共的な問題として捉え、墓や納骨堂を一教会だけで持つのではなく、賀川豊彦が協同組合等で実践した第三セクターの「共済制度」「相互扶助制度」を参考にして進めていくべきであると述べた。

セミナーⅥとして、清野氏が「キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ」と題して講演を行った。清野氏は、教会が未信者葬儀に対し否定的な対応を取る理由をあげ、それらに聖書的な根拠がないことを明らかにし、一般恩恵に基づいて未信者葬儀を行うことの理論的根拠を示した。そして、土浦めぐみ教会で20年間に渡るキリスト教葬儀儀礼の実践の中から、未信者葬儀における説教の注意点、祭壇のシンボリズム、納骨、家庭祭壇、記念会、戒名に替わる天名等について実践例を紹介した。

セミナーⅦとして、倉沢氏が「すべての人に開かれたキリスト教葬式を求めて」と題して講演を行った。倉沢氏は、教会で未信者葬儀が開かれない理由として、伝統的な欧米の神学的枠組みによる神学校教育の問題、異教社会の中における福音の文脈化、インカルチュレーションの宣教学的な課題を前提としつつ、葬式がキリスト教であることの本質を踏まえ、教会で未信者葬儀が開かれてこなかった理由を神学的に検討する。そして、それらを踏まえて未信者にも開かれるキリスト教葬式として、遺族と葬式参列者が故人との絆を覚えながら、永遠のいのちの主であるイエス・キリストとの絆へと移行できるキリスト教葬式とその後の一連の儀礼こそ、未信者にも開かれたキリスト教葬式となるのではないかと述べた。

各セミナーの後には「質疑応答」や「グループディスカッション」の時間が設けられ、受講者と活発な質疑や意見交換が行われた。また、今回の講習会では、特別に同時開催した「第47回夏期教会音楽講習会」の受講者約60人も参加して、清野牧師が土浦めぐみ教会で実際に行った未信者葬儀を「模擬葬儀」として実演した。

受講者からは、「充実したプログラムでとても良かった」「神学的なことから葬儀の場での具体的なことまで幅広く扱っていたので、全体的なことがわかり良かった。教会として今

後の宣教の課題等を共有でき、また質問もできたので参考になることが多かった」等の声があげられている。

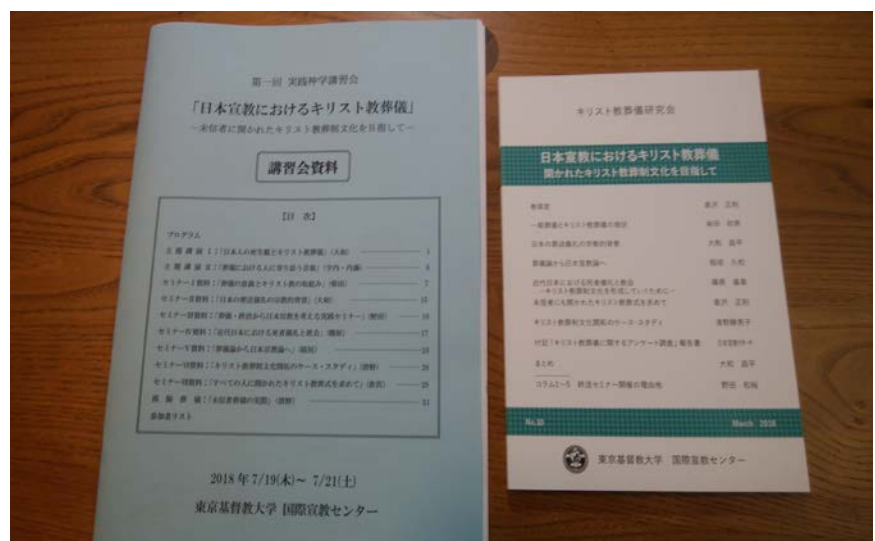
東京基督教大学では、「実践神学講習会」を今後も継続して開催するとともに、キリスト教葬制文化の確立を具体的に推進するための活動も併せて行っていくことが考えられている。

(文責：柴田初男)



【各講師によるセミナー】

【清野師による模擬葬儀】



【講習会資料と『FCC ブックレット No. 10』】

中外日報の新聞記事から【2018年1月～2018年9月】

寺は誰のものか 双方に有益な開放を

2018年1月26日付 中外日報（寺はよみがえるか）

中国地方に住む元銀行員の男性（66）は、2年ほど前に菩提寺の護持会の世話役を辞めた。「寺の活性化のために頑張ってみたが、ばかばかしくなった」と言う。

「護持会」といっても年1回の総会や数回の役員会が開かれる程度。護持会費の未納者も少なくない。6年ほど前に世話役になった男性は立て直しを図ろうと、護持会の規約改正、会員名簿や会計処理の開示などを求めたが、住職や他の役員に聞き入れられず、嫌がらせも受けたという。

それでも「寺は住職のものではなく、檀信徒のものであり、さらには地域の人々のもの」との思いから護持会の会長選挙に出ることなども模索したが、寺側の態度は変わらず引き下がるしかなかった。寺側は取材に「よく分からない」と言葉を濁した。

男性は「これまで檀家は住職の言うことにただ従うだけで、そうした付き合い方をしてきたのも悪かったが、時代は変わった。宗教法人が優遇税制を受けているのは、公益性があつてのこと。一体お寺は誰のものなのか」と問う。

「寺は檀家のために存在する。勝手に一般に公開するのは、やめてもらいたい」

島根県の真宗寺院の副住職（42）は、ある男性総代からそう言われたことが忘れられない。地域に開かれた寺院を目指し、6年前に地域おこし団体の協力も得た本堂でのコンサートや「寺カフェ」などを行うようになったが、このクレームで休止を余儀なくされた。

総代の苦情は檀家のある集まりで出た意見を代弁したものだ。副住職を支持する檀家も多かったが、「その文句に本当に怖くなり、戸惑い、ひるんだ」と振り返る。

その後、副住職は自分自身が寺の外に出て活動する方針に転換。現在は地元の他宗派の僧侶と協働して若者向けの交流行事などに取り組む。「他宗派の仲間も『寺を地域に開放したい、仏教をもっと身近に』という思いは同じだ」と言う。

ただ、反省も多い。「あの頃は行事の回数が多過ぎるなど、今思えばやり過ぎだった。寺を何とかしたいと一人で気負い、檀家の存在を忘れていた。しっかりと合意を得た上で進めれば文句を言われることもなかったはず」。檀家とのコミュニケーションを親密にしながら、自坊での行事も少しずつ復活させる機会に備えている。

滋賀県守山市の三品正親・真宗大谷派蓮生寺住職（61）は、所属する京都教区で2016年度に計5回開かれた宗派主催の「元気なお寺づくり講座」を総代と二人で受講した。

講座は大谷派の寺院活性化策の一環で、僧俗協働の寺院運営を目指す宗派の方針から、住職・寺族と門徒のペアでの受講を原則としている。特に子ども会活動に熱心な三品住職は総代と相談しながら、次世代の中高生・大学生・子育て世代など年代に応じた寺への参拝行事を4年間で進める計画を立案した。

「お寺を住職のものだとは思っていない」三品住職は「もちろん教化活動は私がリードするし、役員会で意見も言うが、法要の準備や予算などはご門徒さんが決める」と説明。講座で総代と一緒に立案した計画の実行にそれほど不安はない。

ただ、気になることもある。計画案を寺の役員会に報告して意見を求めたが、積極的な提案はほとんどなかった。「『今まで通りでよい』という感覚が強く、『これから先、お寺が立ち行かなくなる』という危機感はない。そのためにも次代を担う青年世代への取り組みを企画したのだが」と話した。

（池田圭）

教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会 日本司教団関連文書

2018年平和旬間 日本カトリック司教協議会会長談話

「平和の問題に常に関心を」

昨年暮れにフランシスコ教皇様は、「焼き場に立つ少年」の写真に目をとめられ、「戦争がもたらすもの」と表題をつけて署名し、広く頒布するよう指示されました。この写真は、長崎の原爆投下1カ月後に米国従軍カメラマンが撮影したもので、戦争がもたらす不幸、悲しみ、虚しさ、憤りを表しています。戦争は決して引き起こしてはなりません、という教皇様の強い意思が伝わってきます。

今年は第一次世界大戦終結100周年、インド独立の父マハトマ・ガンジー暗殺70周年、アフリカ系アメリカ人公民権運動の指導者キング牧師暗殺50周年です。あらためて戦争と平和について考えさせられます。この一世紀の間、国際連盟設立、「国際紛争解決のため、および国策遂行の手段としての戦争の放棄」を誓ったパリ不戦条約締結、再度の大戦とその後の国際連合設立、東西冷戦、共産圏崩壊などがありました。一方、英仏ソ米などの100ほどの植民地が独立を果たしたことは幸いなことです。全体的に見ますと、今日まで世界規模で平和と人権保護が希求されてきたと言えます。

しかし、いまだ深刻な地域紛争、テロ、核兵器の脅威、難民問題、さまざまな形の差別、経済的格差および摩擦などが世界中の人々の平和を脅かしています。昨年7月には国連総会で122カ国と地域の賛成多数により核兵器禁止条約が採択されましたが、核兵器の全廃と根絶を目的として起草されたこの国際条約も、今年7月7日現在バチカン市国を含む11カ国しか批准していないという状況です。核兵器保有は抑止のために必要であるという考え方が根強いからです。

しかし核兵器保有は、むしろ軍拡競争の原因となり、ひいては経済の軍需産業依存、軍需と政治の癒着を来してしまいます。抑止とは、武力で平和を維持しようとする試みですから、敵対心、相互不信感、利権の衝突など対立の要因をいっそう深刻化させ、和解、和平、相互理解の基盤を徐々に崩してしまいます。世界が直面する喫緊の問題（環境、移民・難民、格差や貧困など）は、長年の抑止論と不均衡な経済制度から生まれています。

また、テロ対策や安全保障を理由に言論統制が行われ、インターネット上のサイバー攻撃や差別意識を煽るヘイトスピーチが横行し、スマホ依存症に起因するさまざまな問題も生じています。メディアは、特定の国や民族や宗教等について否定的な固定観念を作るのではなく、正確な情報を公平に提供し、相互理解を促すべきです。

わたしたちは、人間が神に象られて創造された高貴なものであり、全人類が一つの家族であると教えられています。また、人類は和解と相互愛によって連帯を構築する使命を神から与えられていることを知っています。このような信仰と確信に基づいて、愛をもって真実を語り、互いに高め合い、きずなをつくるために情報を役立てるように努めましょう。また世界特に東アジアの情勢を常に注視し、為政者たちが自国の利益の優先ではなく相互の善益と平和を追求するために徹底した対話を忍耐強く続けることができるよう祈りましょう。

2018年7月7日

日本カトリック司教協議会会長
カトリック長崎大司教 高見 三明

「日本伝道をどう考えていくか」を主題に開催
「宣教基本方策(1961年)を巡り議論」

発題

3月5～6日、2017年度日本基督教団宣教方策会議が富士見町教会を会場に、主題を「日本伝道をどう考えていくか～宣教基本方策をもとに」と題して開催された。教団四役はじめ、教団内の各委員会、教区代表者等合わせて84名が出席した。

米倉美佐男宣教委員長が、個人的な意見としつつ、「色々な問題を抱えている教団であるが、日本基督教団信仰告白と教憲教規を整えていく中で教団が教会と成ることを願っている。様々な意見があろうが、会の中で忌憚なく話し合いたい」と挨拶し、教職・信徒各2名の発題を聞くところから会議が始められた。

最初の発題者は古津啓太牧師(神戸東部教会)。同氏は冒頭、「教団のバラバラさに自信を持つべき」と語り、現行の宣教基本方策を詳細に分析し、「基礎」「教会」「教職」「信徒」「伝道」「内外協力」「調査広報」「機構」という宣教方策の8つの項目それぞれについて、数々の提案をした。

続いての発題者は西谷美和子氏(大宮教会員)。「日本伝道とは、神の家族がキリストの愛に応え、受容し合う歩み」と題して女性信徒の視点から発題した。大宮教会の牧会の状況を紹介し、全国教会婦人会連合の働きに言及しつつ、「信徒一人ひとりが祭司として執り成し合い、悲しみ、喜びを受容する信仰に立つとき、イエスの名によって福音を宣べ伝えることが出来る」と結んだ。

3人目の発題者は中蔦暁彦氏(八王子教会員)。11頁の資料が用意されたが、特に「信仰生活」「伝道の対象」「信徒伝道」「課題と疑問」「伝道の拠点」について語った。同氏が強調したのが、信徒減少という現実の中で、伝道は教職任せではなく信徒が教職と共に担っていく業である、信徒は人を教会に連れてくるのが重要である、伝道にはそれなりの財が必要である、ということであった。

最後の発題者は吉澤永牧師(愛知教会)。自身の信仰のルーツは教団ではないというところから話は始まり、それ故ある時期まで教団で起こっていることを自分の問題として受け止めることができなかつたことや、教団で働きの方が与えられて以降に感じた問題点を具体的な事例を挙げて語った。

発題後フロアからは、特に2人の教職の発題に対する意見があつたが、米倉委員長は、紛争世代と紛争を知らない世代のギャップの問題こそが今回のテーマの一つであると語り、その中で伝えるべきことは伝えなければならないし、どこで教団が一致できるかということを超えて探っていくべきと応じた。

(小林信人報)

講演・全体協議

「信仰の一致における伝道協力」を改めて訴える

2日目、石橋秀雄議長が「マケドニアの叫びー行き詰まりの中で」と題する講演を行った。冒頭、東日本大震災に直面し、「信仰の一致における伝道協力」を訴え取り組んだことを振り返り、教団における信仰の一致が信仰告白による一致であることを語った。

続いて、この告白にある教会が「キリストの体としての教会」、「御言葉の秩序としての教会」であることを教憲の条文を紐解きつつ語り、「教会の第一の使命が、受洗者を生み出し、聖餐に

において十字架と復活の命に与り、キリストの体である教会の枝となって行くことである」、また「教憲による一致があつてこそ、教会の力を発揮する」と述べた。

また、礼拝の恵みに与った者が愛の業に向かうことも伝道であるとし、東日本大震災の際、礼拝共同体の支援と共に、教会を通して地域の支援を行ったことに触れ、「礼拝と証しの生活は切り離せない」と述べた。

最後に、使徒言行録16章で、パウロが御言葉を語ることを聖霊によって禁じられる中、マケドニア州の叫びを聞き、ヨーロッパ伝道の道が開かれたことに触れ、危機の中で伝道が聖霊の業であることに希望を与えられ、助けを求める叫びを聞くことの重要性を語った。

講演後に行われた分団協議は、議論を交わすよりも聞き合うことに主眼を置いたワールドカフェ方式で行われた。宣教基本方策の8つの項目毎にテーブルが設けられ、参加者は巡回しながらそれぞれのテーマについて協議し、テーブル毎に用意された模造紙に、意見を残していく。分団協議後、テーマ毎の報告を聞く時を持った。

以上を踏まえ、全体協議では、様々な意見が述べられた。特に、教団、教区、教会の役割について、「伝道するのは教会であつて、教団がすべきことは教会の伝道をいかに支えるか」という意見や、今回、全教区が出席していないこと、距離を置いている沖縄教区から、教区の申し込みを経ず参加者があることを指摘しつつ、「教区を軽んじるべきではない」という意見があつた。沖縄教区からの参加者は、沖縄には、和解のために歩み寄ることへの求めがあることを紹介しながら、「伝道が進展しない原因は、キリスト者が和解して一つになっていないから」と述べた。その他、「教団から委員会に問われたことに対し、真剣に議論し応じて、まともな返答が無かつた。聞く姿勢が無いことが、宣教基礎理論が進まない原因」等の意見があつた。

(嶋田恵悟)

日本聖公会【日本聖公会 管区事務所だより (2018年1月25日 第329号)】

日本聖公会<宣教・牧会の十年>提言からの中間点に在って
—2017年12月11日～12日／「宣教担当者の集い」にて—

管区渉外主査 司祭 アシジのフランシス 西原廉太

昨年12月11日(月)、12日(火)に、京都の京都教区センターを会場にして、「宣教担当者の集い」が開催された。各教区から宣教担当者が集まり、日本聖公会<宣教・牧会の十年>提言からの中間点に在って、現在の各教区の取り組み、状況、課題等について、互いに耳を傾けあつた。私は、2012年の「日本聖公会宣教協議会」において基調講演をさせていただいたこともあり、今一度、私が主題としていたのは何であつたのかを中心に、お話させていただく機会を与えられた。以下、その概要を記したい。

2012年「日本聖公会宣教協議会」の基調講演の中で、私は、アングリカン・コミュニオンにおける「宣教の5指標」(5 Marks of Mission)について紹介した。①神の国の福音を宣言すること。②教え、洗礼を授け、新たな信徒を養うこと。③愛の奉仕によって人間の必要に応えること。④社会の不正義な構造の変革に参加すること。⑤被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするため努力すること。現在、世界の聖公会はこの「宣教の5指標」を共通する宣教目標として大切にしており、日本聖公会が「宣教」を考える場合に、「宣教の5指標」抜きに論じることはできない。

アングリカン・コミュニオン特別常置委員会“MISSIO”は、ACC-11(1999年、スコットランド)に最終報告『宣教における聖公会のわたしたち変革への旅—』を提示している。この最終

報告は、「宣教の5指標」についての重要性を再強調する一方で、宣教を行なう視点がこの5つしかないと考えられてはならず、それぞれの聖公会が置かれている文脈の中で、より創造的に考えられなければならないと指摘している。重要なことは、「宣教の5指標」を、そのまま引用することではなく、それぞれの聖公会が、それぞれの状況や課題に向き合う中で、豊かに「解釈」しなければならない、ということである。その意味では、日本聖公会の宣教の課題とは、日本聖公会が置かれている文脈、状況の中で、いかにこの「宣教の5指標」を解釈し、独自の言葉に練り上げるか、ということにあると言っても過言ではない。「宣教の5指標」が、ばらばらに置かれるのではなく、宣教指標の5つのロープが、しっかりと寄り合わされて一本の強靱な「綱」となる、という理解は不可欠である。

この包括的な宣教イメージについて、2012年「日本聖公会宣教協議会」で、私は、古代教会以来、大切にされてきた「教会の5つの要素」をさらに紹介した。①ケリュグマ：「み言葉を宣べ伝えること」、②ディアコニア：「この世界、社会の必要に応じ奉仕すること」、③マルトウリア：「この世界、社会に対して、福音を具体的に証しすること」、④レイトウルギア：「祈り、礼拝すること」、⑤コイノニア：「交わり、共同体」である。ケリュグマ、ディアコニア、マルトウリアのいずれの要素が欠けてはならず、またそれらがレイトウルギアと結びつけられながら表現される。それらすべてが包括されるコイノニアが、わたしたちの「教会」である、ということである。アングリカン・コミュニオン「宣教の5指標」には、例えば「祈り」が含まれておらず、日本聖公会独自の「宣教の道しるべ」を紡ぎ出すためには、この「教会の5要素」が大いに参考になると考えたからである。しかし、あくまでも、日本聖公会が世界の聖公会と共に目標にすべきものは、「宣教の5指標」(5 Marks of Mission)であって、その私たち、日本聖公会独自の解釈、展開の一助として古代教会以来の「教会の5要素」の理解を援用したい、ということである。

私自身が、この「包括的宣教論」の重要性を痛感したのは、実は、1995年に清里・清泉寮で開催された「日本聖公会宣教協議会」に遡る。この宣教協議会も、管区総会で決議されたものであったにも拘わらず、約半数の教区主教はほぼボイコットに近い形で不参加であった。いわゆる「社会派」の集まりといったレッテルが貼られたようにも思う。日本聖公会においても、長年、「社会派」対「福音派」「教会派」「伝統派」といった不毛な対立が続いてきたと言わざるを得ない。教会が社会的諸課題に取り組むことが何故、教会にとっての宣教課題なのか、しっかりと共有されてはいなかったし、「宣教」か「牧会」か、といった誤った二項対立が蔓延していた。

そのことの反省を踏まえて、2012年の宣教協議会で、私が確認したかったことは、教会が置かれている社会の課題に関わることは「社会派」なのではなく、実はすぐれて「牧会的」な働きであって、それはまさしくわたしたち聖公会の「伝統」であるということであった。国教会としての英国教会は、数世紀前までは、英国教会の信徒＝英国国民という前提条件が成立していた。すなわち、教会の“pastoral care”（牧会的配慮）とは、もちろんパリッシュに住む信徒への配慮なのであるが、それは同時にパリッシュの全地域住民に対する配慮を意味していた。したがって、地域社会における課題に対して責任を持つことが、教会の牧会的配慮の内容に必然的に含まれていた、ということの再確認である。この場合の「牧会」とは、聖職者のみならず、信徒も含めた、パリッシュの教会共同体全体で担われるものを意味する。そして、この意味での「牧会」こそが、実は聖公会にとっての「宣教」であると言い切っても過言ではない。私たち聖公会にとって、「宣教」と「牧会」は切っても切り離せないコインの裏表なのである。

また、こうした宣教を考える会議等では、どうしても、これからどのような新たなプログラムを始めるべきか、といった議論になりがちである。それはそれで必要なことなのだが、しかし一方で、すでに、私たちの信仰の先達たちが、歩んできたその道程に、ていねいに学ぶこともまた、不可欠なことでありと確信するものである。各教区・教会ですでに担われてきた、一つひとつの宣教・牧会の実践や物語にこそ学ぶべきであろう。日本聖公会は、現在どの教区、教会も、教勢の低落、財政状況の逼迫等に苦しんでいる。しかし、これらの問題を解決する特

効薬などはなく、むしろ教会の宣教の原点、教会としての牧会的働きの原点に立ち帰ることによってのみ、道筋が備えられてくるに違いない。

私たちの宣教の原点は、実はきわめてシンプルなものである。信徒への牧会はもちろん、教会のあるパリッシュ全体、地域全体に対する牧会的働きを、ていねいに実践していくことに尽きると言っても過言ではない。その地にある、かすかな声に耳を傾けていくこと、声を出せない人々の「声」となっていくこと。この世界、社会、絶望の内にある人々に対して、神の祝福、<いのち>の喜びを、語り続けること。パリッシュにある課題、そしてまたこの世界にある課題に、教会として、ていねいに取り組むこと、私たちの教会が、一人ひとりを抱きしめていくこと、温もりを与えていくこと以外にない。

私たちは2022年に、再度「宣教協議会」を開催し、各教区・教会がこの10年の間に取り組んだ<宣教・牧会>の収穫を持ち寄ることになっている。しかし、そこで持ち寄られるべき収穫とは、必ずしもどれだけ信徒が増えたか、献金額が増加したかということだけではなく、一つひとつの、ていねいな<宣教・牧会>の経験、物語なのである。

日本聖公会【日本聖公会 管区事務所だより（2018年6月25日 第333号）】

日本聖公会第64（定期）総会を終えて

～新たなる宣教・牧会に向かって～

総会議長 主教 ナタナエル 植松 誠

日本聖公会第64（定期）総会は2018年6月5～7日、東京教区牛込聖公会聖バルナバ教会を会場に開かれました。以下、議長挨拶と、また決議されたものの中からいくつか重要と思われることを挙げたいと思います。

- ① 今総会において、忘れてはならないと思われる二つの事柄があります。その一つは、2012年9月、浜名湖畔で開かれた宣教協議会です。既に6年の年月が経ち、多くの方々にとっては記憶から薄れているかもしれません。しかし、この宣教協議会は、日本聖公会が当面する多くの課題と大々的に取り組んだものでした。「宣教する共同体のありようを求めて」というテーマのもと、参加者は4日間にわたって熱心に議論を重ね、その結果、「日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言」が出されました。2012年から10年間にわたる日本聖公会の宣教指針です。そして、10年後の2022年に、再度宣教協議会を開いて、10年間の宣教・牧会の実りを持ち寄って皆で分かち合うことが決められています。今総会期は、その10年の6年、7年目にあたります。4年後に迫っている宣教協議会に向けて、提言を読み直し、そこに挙げられている課題に真剣に取り組む2年間にしなければなりません。
- ② もう一つは2011年3月11日に起きた東日本大震災です。2012年秋の宣教協議会や、それ以外の数々の集まりで、日本聖公会の宣教の原点は、社会で小さくされている人々、周辺化されている人々と共に歩むことであると何度も確認してきました。震災から7年経ちましたが、まだ多くの方々が苦しみや悲しみ、困難の中にいらっしゃいます。特に、東京電力福島第一原発事故による被災者の多くには、解決の道は全く見えていません。また、熊本などで的大地震、九州北部の集中豪雨などもありましたが、私たちは、この宣教の視点を今総会期にも大事にしていきたいと思います。
- ③ 2012年の日本聖公会第59（定期）総会で、私たちは「原発のない世界を求めて～原子力発電に対する日本聖公会の立場～」を採択しました。しかし、それ以後も、各地で原発の再稼働は進み、新たな原発の建設も行なわれています。東日本大震災での原発事故によって起こされた惨禍も、未だに苦しみ・悲しみ・不安から逃れられない多くの被災者もまったく無視されているような感があります。今総会では、「原発のない世界を求める国際協議会」開催が決議されました。環境保全については世界の聖公会でも取り組んでいます。原発の是非に関するこのような会議が日本聖公会の主体性の中で開かれるということは、世界の聖公会に対する私たちの大きな貢献になると私は信じています。

- ④ 朝鮮半島をめぐる動きが活発になっています。最近行なわれた南北首脳会談、北朝鮮と中国、また米朝首脳会談が、朝鮮半島の緊張を和らげ、平和的な解決に向けた関係諸国の努力が良い結果をもたらすように祈りながら、今総会期も当事者である大韓聖公会との平和に向けた協働に取り組んでいきましょう。
- ⑤ 日本聖公会は女性の司祭職を認める法規改正から20年が経ち、当初必要とされた「女性司祭の実現に伴うガイドライン」が今回改定され、また、「女性の聖職位に関わる委員会」も設置されました。これは、日本聖公会において、司祭に叙任されるすべての者が、排除されたり否定されるのではなく、分け隔てなくその司祭職が認められ、務めが十全に果たされ、互いに補充し合うことができるようにというものであると私は信じています。「女性司祭」への賛成、反対は今も日本聖公会の中にあります。誰もが、キリストの福音を忠実に生きるという確信の中で、祈り、熟考し、聖霊の導きを求めて議論します。しかし、それが神の御心に沿うものかどうかの判断は、最終的には神ご自身にお任せしなくてはならないし、そのために、私たちは常に忍耐強く耳を傾け、学び、そして謙虚にならなくてはならないと思います。
- ⑥ 安倍内閣と与党などによる憲法改正の動き、特に憲法9条の改正に向けたいろいろな動きに対して、私たちはこれまでの日本聖公会の歩みの中から、反対の声を上げていかななくてはならないと思います。この点については、過去の宣教協議会や総会での「戦争責任告白」を読み直し、「正義と平和委員会」の取り組みを支えながら、私たち自身が「平和の器」として働くことができるように祈り、働きたいと思います。
- ⑦ 今総会では横浜教区の主教選挙が行なわれました。主教選挙は、第一義的には、それぞれの教区で主教を選ぶことになっていますが、総会で教区主教選挙が行なわれることが最近増えているように思えます。教区における主教選挙をめぐる状況が、ここ10年間ほどで大きく変わってきているのかもしれませんが、そして、その状況は今後ますます深刻になっていくと思われれます。この件について今後いろいろな部門で議論を深めていかななくてはなりません。
- ⑧ 最後に、私は今総会で再び首座主教に選出されました。私にとっては定年までの最後の任期となるこの総会期、どうぞ、首座主教のためにお祈りくださいますようお願いいたします。
- この新たな総会期、主の聖霊が日本聖公会を豊かにお導きくださいますように祈ります。

日本バプテスト連盟「バプテスト NO.753」 (2018.4)

協力伝道会議

2018年度は、全国各地域で「協力伝道会議」を実施していくことにしています。連盟の70年にわたる協力伝道の歩みを振り返り、今という時代にふさわしい教会の宣教、教会形成、協力伝道の在り方を、みんなで考えていきたいと願っています。諸教会・伝道所が直面しているさまざまな課題や閉塞感の背後に、時代の移り変わりに伴う価値観の変化や多様性があると考えられます。そうしたものを捉えながら、「変わることはない主の福音」をより多くの人たちと分かち合っていくために、私たちが持っていたこれまでの前提や枠組みを見直していけるものにしていきたいと願っています。

この「協力伝道会議」は、宣教部が呼びかけて各地の地方連合の協力を得て実施されます。それぞれの連合が主体となり、地域の特色を活かしたテーマやプログラムが組み立てられようとしています。信徒大会や連合キャンプなど、集会の名称も連合によってさまざまです。各連合の総会でも、この「協力伝道会議」の計画が審議されることになると思います。

協力伝道の働きは、連盟に加盟しているすべての教会に関わるものです。これからの協力伝道がどうあるべきなのか、みんなで一緒に考えていきましょう。そして、これからの協力伝道をみんなで一緒に作りあげていきましょう。「協力伝道会議」が、そうした会議になることを期待しています。

(宣教部長・松藤一作)

「ポストモダン社会と若者たち」

キリスト者学生会 (KGK) 総主事 大嶋 重徳

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」(コヘレトの言葉12章1節 a)

キリスト者学生会(KGK)という学生伝道の現場で働く主事たちが、「学生たちが変わった」という異変を感じ始めたのは、「価値観は多様」という時代に取り囲まれてきた学生が現れた1990年代に入ってからのことだった。いわゆる、ポストモダンと呼ばれた社会の真ただ中を生きてきた世代である。ポストモダン社会は、絶対的真理や科学的知見すらも「作られた知の一形態」に過ぎないとする。その結果、正常な思考を展開する基軸も多種多様な形をとり、すべては相対化される。この「価値観は多様」とするポストモダン社会で育ってきた現代の若者たちにとって「権威」は「決定的」なものではない。むしろ「決定的、絶対的権威」は、耳慣れない、高圧的でネガティブなイメージを伴った言葉となっている。現代の若者が育ってきた世代において価値は、多種多様な形をとり、絶対的権威などはない。そして「権威」は、多様な価値観の中で細分化し、「このテーマを開くなら彼だよな」といった、あるテーマに詳しいことに過ぎないものでしかない。

その若者たちに、「聖書の語るようにこう生きるべきだ」と力を込めて語っても、「ふーん、そういう考え方もあるよね」と受け止められる。かつて聖書の絶対的真理に心から同意し、深い葛藤と議論の末、聖書の権威性を認めざるを得なかった世代には、のれんに腕押し状態と感じる。「聖書がそう言っているのは分かるけど、私の気持ちは---」と、聖書の権威も自分の感情と相対化され聖書と自分が等しい価値を持ってしまっている。

また一方、ゆがんだ権威であるカルト教団にはまる若者たちがいる。彼ら彼女らの多くは人生を本気で考えている。「多様化した価値観」という閉塞状態の中、「そうは言っても、確かなものはあるはずだ」と、人生の絶対的真理を求め、すべてを超越した「権威」を探している。その多くは、パワースポットを巡り、超越的な人生に力を与えてくれる「ものや人」を求めている。

ポストモダン社会の問題は、「権威の喪失」だけではない。一生懸命に悩んだところで決定的な価値に出会えるはずがないという「失望」を生んだ。そのため「悩む」「深く考える」ことはネガティブで、全く意味のないことだと思わせる。まじめで、深く悩んでしまう傾向にある自分は駄目な存在で、早く「すっきり」し、「さっぱり」したいと願う。そして深く悩んだり、考えたり、疑ったり、また真理かどうかという吟味をいとも簡単にカルト教団の指導者に委ねてしまう。こうした確かな真理を求める若者たちもまた、「悩む」ことの手なポストモダン社会の申し子なのだ。そしてそのカルト教団の語る教義が、真理かどうかという吟味はなく、自分のフィーリングで「いい感じ」なものを優先させる。

教会でも「先生、先生」と牧師に何でも助言を求め、さも牧師の権威を認めているかのように見える若者は危ない。「先生」と呼ばれる存在にとって、そのような一見従順に見える若者の存在は時に心地よく、必要とされている感が生まれ、張り切っているいろいろな指導しようとする。しかし実際に、一旦、牧師や教師の指導や助言が本人のフィーリングにあわなくなれば、それまでの従順ぶりから嘘のように離れていくことが多々ある。

この時代において光り輝く聖書の魅力とは何だろうか。聖書の言葉に従えば従うほど、そこにはきちんと悩み多き人生が待っていることであり、従いきれない私、罪を脱ぎきれない人間の姿がはっきりと記されていることにある。しかしその悩みは、決して意味のない悩みではない。きちんと自分の罪に悩みぬいた先に、十字架の赦しと聖霊により聖なる者とされていく道のりがある。それが、私たちの悩みの先に確かにある希望だ。その「悩み」の道のりを、聖書

の光に照らされながら歩き続けることにより、細分化された「権威」のひとつであった聖書が、決して多様な権威のひとつではなく絶対的権威として形をもってくる。そのプロセスに丁寧に付き合っていくことこそ、現代の「権威なき時代の権威」を語る牧師、説教者、若者たちを取り巻く大人の責任である。

私は出来るだけ「きちんと聖書の前で悩む」ことを励まし、自分もまた「深く悩んでいるひとりだ」ということを若者たちに告白しようと思っている。若者たちが本当に「聖書の権威」に出会うためには、聖書の権威の前で深く屈服し、悔い改め、今後の生き方を悩みながら生きていこうとする大人との出会いが必要だ。若者たちの優れたところは、権威への服従が上辺だけかどうかをすぐに見極めることにある。そして若者たちは、大人が聖書に対し真剣に献身をし、聖書が語るように生きようとしているかどうかに関心を持っている。彼ら彼女らにとって、「言葉だけの聖書」には意味がない。ポストモダン社会は、真理かどうかよりも、「生き方」を問うてくる。だから現代の若者たちは、その人がどういう人なのかが問題となる。これは、自分や相手の年齢や肩書きで上下関係が決まるという考えに慣れている年代にはとてもやりにくい。自分がどんな人間なのか、その中身を知らせたり、伝えるにはかなりの時間がかかる。むしろ、「先生」「先輩」「部長」という肩書きで関係を持つことの方が、楽な人間関係を結ぶことが出来る。

エマオの途上で復活した主イエスは、復活の主も、またその権威をも認めることが出来ずに「暗い顔」になっている二人の弟子の話に、「その話は何のことですか」と耳を傾ける。「あなただけのご存じなかったのですか」と、復活の主人公である主イエスに対してばかにした態度を取る彼らは、復活の事実も「…婦人たちが言ったとおりで」と第三者の立場に立ち、福音の外側にしようとする。

しかし、主イエスはその彼らの「暗い顔」に耳を傾けながら、聖書全体からご自分の権威を語り始める。切り貼りの、対処療法的な、その場しのぎ的なアドバイスではなく、二人の弟子たちに聖書全体の「ものの考え方」を語った。しかもその語りは弟子たちの心に深く届き、「もっと話を聞きたい」と思わせる内容だった。そしてその後、客である主イエスはパンを割き、言葉だけではなく仕え、愛する姿を見せた。その行動を伴いながら示された姿は、最後の晩餐での主イエスの姿とつながり、二人の弟子たちの目が開かれた。大切なのは、牧師が、役員が、さらに大人のキリスト者が、全生活において神の言葉への服従を徹底することにある。牧師も教会の役員も、悔い改めから逃げないこと、教会で起きる喧騒からの和解を諦めず、誠実をつくり続けること、そして聖書に従い続ける姿勢だ。それこそが、若者たちの前で神の言葉の権威が光り輝く時となる。若者たちは神の言葉に出会いたいと願っている。そして神の言葉の権威に従うキリスト者の本物の生き方に出会いたいとも思っている。主体的に彼ら彼女らが神のみ前に生きていくためには、真の権威が必要であり、神の言葉の権威に従うことを諦めない大人の姿が必要だ。そうしたひとりの大人のキリスト者の存在によって、また神の言葉に従う教会共同体の群れ全体から、「権威なき時代の権威」は回復することが出来ると信じる。私たちは若者たちから悩むことを奪わず、聖書の権威を手触りをもって確かめる時間を大切にしていきたい。そこでこそ次の時代の教会を担う若者たちが、主イエスの権威を帯びる教会で責任を果たすことが出来るようになる。教会が主イエスから委託されている権威は、振りかざすものではなく、エマオの途上を歩まれた主イエスと同じように、若者たちと真摯に向き合うことから継承されていく。



「希望を告白する集まり」

総主事 宗田信一

群馬県には長い歴史を持つキリスト教主義中高一貫校の共愛学園と新島学園があり、私が2017年3月まで牧師をしていた高崎福音キリスト教会の礼拝出席者の約2割は両学園卒業生が占めていました。また、群馬県で私が病床の教会員を訪ねるなどした病院にはキリスト教を標榜し、またクリスチャンが経営しているところが少なからずありました。また、私の息子が通っていたキリスト教幼稚園の他にも、聖書の教えを重んじる幼稚園がいくつもありました。そのような中、キリスト教文化に触れている多くの人々に福音を宣べ伝えたいと思っていた時、群馬県出身で私の母校である東京基督教大学の山口陽一先生（現学長）から、同大学の支援会を設立準備するとともに並行して、「群馬の青少年伝道を考える会」を立ち上げてみないかという提案をいただきました。

この提案は、東京基督教大学の卒業生たちが中心に準備をし、群馬諸教会の牧師、クリスチャンの教育関係者や医療従事者などと協力して、群馬の青少年伝道について語り合う場をつくるというものでした。そして、教会役員会の了解を得た私は、そこから山口陽一先生とともに準備を進め、群馬県にある教会の牧師たち、クリスチャンである新島学園校長及び共愛学園校長、高崎市の上中居こどもクリニック医師らに声をかけ、更にはキリスト者学生会（KGK）、高校生聖書伝道協会（hi-b. a.）にも参加案内して、2016年11月28日新島学園を会場に第1回会合を開き、正式に会を発足しました。最初は地域の牧師、校長、医師、学生伝道団体責任者らが一堂に会して少し緊張もありましたが、互いに信仰のルーツを明かし、宣教の思いを分かち合ってみると、みな同じようなことで悩み、考え、伝道の働きに取り組んでいることがわかりました。そして、これまでの経緯や立場や身を置く環境が違っても、みな一つの福音を宣べ伝えるため最善を尽くしている姿を垣間見ることができました。

残念ながら私は2017年4月転任により群馬県外へ出るようになってしまいましたが、その後も、「群馬の青少年伝道を考える会」は、2017年5月22日と同11月13日に、第2回と第3回会合を開き、地域教会の牧師とクリスチャン教育関係者と医療従事者、更には学生伝道団体スタッフを結びつけるプラットフォームの役目を果たしています。そしてこの交わりから、2017年夏に東京基督教大学の夏季伝道チームが、群馬県にある教会などに派遣されることとなりました。また2018年3月には、同大学と新島学園とによるイングリッシュキャンプが軽井沢で開催されました。更には高崎市のクリニックでKGKとhi-b. a.の集会が始まり、共愛学園とhi-b. a.の協力が今後予定されています。2016年11月の第1回会合からわずか1年で、ここまで群馬県の諸教会と学校と病院と宣教団体が、知り合い、連携して、伝道のため協力していることに驚かされています。

私が神学校卒業後に高崎福音キリスト教会へ赴任した2005年の春、当時のKGK総主事が教会を訪ねて来てくださり、地方教会を巡回する中での率直な感想として、「地方教会の若手牧師たちは孤独と相思しました」と語ってくださいました。このコメントが当を得ていると、後に私は自分の経験を通して知ることになりました。そして今、これは地方だけでなく都市部でも同じことが言えるのかもしれないと、首都圏の教会で奉仕をする中で感じています。また、若手だけでなくベテランの牧師にも孤独の問題はあると感じています。使徒パウロは、ローマ人への手紙12章とコリント人への手紙第一12章で、教会を人の身体に譬えています。そして、神は教会に加えられた私たちを用いて福音を宣べ伝え、神の国をつくられることを教えています。神の国をつくる身体として教会に加えられた私たちは、機能を十分に発揮し、躍動するために、集まって福音の命を共有し、希望を告白する交わりを持ち続けることを忘れてはならないと思います。

私が高崎に赴任してから聞もない頃に洗礼を受けた当時高校生の姉妹は、今では欠。不王事と結婚し、学生伝道に勤しんでいます。また、私が高崎福音キリスト教会で一緒に聖書を読んでいた学生が最近 hi-b. a. 高崎集会に集まっていることを聞きました。短い期間ではありましたが「群馬の青少年伝道を考える会」に参加し、交わることで、私自身、多くの協力者に恵まれ働いていたことに気づかされました。この私が群馬で経験したような福音の命を共有し希望を告白する交わりが、都市部でも地方でも形作られ、教会の力となり、神の国の前進のために用いられていくことを期待しています。

「約束してくださった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。・・・その日が近づいているのが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」（ヘブル人への手紙10章23、24節）

（JEA 英字機関誌に寄稿）

日本同盟基督教団「世の光 NO.803」（2017.8）

教会とふくし 「ふくし=神のいのちが人に豊かに宿る希望としあわせ」

土浦めぐみ教会/東京基督教大学（キリスト教福祉学専攻） 井上貴詞

<危機から機会そして希望へ>

現代社会は、子ども、障がい者、高齢者、外国人またそうしたカテゴリーに入らない生きづらさを抱えている多くの人の「尊厳」が脅かされ、苦しみと痛みを抱えています。もちろん、世界をみれば日本よりもはるかに悲惨な状況、戦争・テロや災害、迫害による難民化と飢餓で命を落とす人々の深刻な問題があります。そうした世界の状況に目を向けて祈りつつも、教会は自分たちがおかれたその地域、時代の中でどう生き、どんな使命を果たすのかが問われています。教会内に目を向ければ、牧師不足、信徒の減少、少子・高齢化の厳しい荒波にもまれ、どの方向にいけば良いのか嵐の中を漕ぎあぐねている小舟のようです。まさに危機の時代です。

しかし、危機は機会の時でもあります。教会が嵐の中で木の葉のように揺れ動く小さな小舟だとしても、教会は主イエスをかしらとするところですから、危機の中でも主の愛を証しつつ、希望を見つけていきたいと思えます。古代ローマ帝国に疫病が蔓延し、多くの死者が出た危機の時代に、カルタゴの司教キュプリアヌスは、「この疫病は恐ろしくて致命的なものに見えるが、おのおのの正義や心を吟味するために、これほど適切で、これほど必要なことがあるか」と述べて、勝利の栄冠を得るクリスチャンの希望を証しました。実際にいのちがけの愛の実践が古代の教会に爆発的な進展をもたらしたという社会学者の分析・論証もあります。宗教は、そうした危機や試練の時こそ、真価が試される時であり、そこで自分たちがどのような態度やスタンスを取るのかが問われる時です。苦難が忍耐を生み、品性が練られて希望が生まれるとは（ローマ5章3～4節）、文脈的にいえば「私たち」すなわち「教会」を指しているのですから、この希望を何とか神によって紡がせていただきたいと祈るのです。

<教会のふくしミニストリー>

さて、筆者はこの3年余りで、「ふくし」に関わる教会を30以上見聞してきました。その中で、信徒が高齢化し、減少し、会堂も老朽化して立て直す目途もない、このままでは教会を閉じるしかないという岐路に立たされた教会がいくつもありました。そのような危機的な教会に派遣された牧師が、その地域の必要（ニーズ）に目を向け、自殺未遂者の救出や社会復帰、子ども食堂の着手、障がい者の支援活動、信徒と共に始めた「便利屋業」などを始めることにより、窮地を脱していく例がいくつもありました。逆に「みな高齢化してきたので自分たちの老人ホームを作ろう」という機運を盛り上げてがんばっている教会がゆき詰まり、分裂の危機に

陥る場合もあります。なぜならば、それは往々にして周囲から利己的に映ってしまい、地域社会に対しても閉鎖的な教会である傾向があるからです。閉鎖的であるというのは、地域から遊離していることであり、その結果宣教上の接点も乏しく、新来者に対して自分たちが築いている独特なサブカルチャーが伝道の壁になっている事に気づかないということも起こります。また、念願の高齢者ホームができたのは良かったが、肝心の教会の霊性がボロボロになり、後から着任した牧師がその立て直しに壮絶な戦いを強いられるというケースもありました。

いずれにしても、教会の福祉ミニストリーは、認知症やがん患者のためのカフェ、高齢者サロンや体操教室、こども食堂、信者どうしのシェアハウス、外国人子弟のための教育支援、被災地支援などのインフォーマル（制度外の）支援から、精神障がい者や認知症高齢者のグループホーム、就労支援、障がい児の放課後デイサービス、高齢者や知的障がい者の通所事業、訪問介護や訪問看護などの制度事業に至るまで多岐にわたります。

次回からは、教会とふくしの結節点となる神学的テーマや実践的課題に触れてみたいと思います。（つづく）

*この寄稿では、単に世の中の福祉事業を教会もすれば良いということだけでなく、またそうした福祉行政の縛りよりも、もっと広い人のしあわせを助け、証しをするのが教会の使命という観点から「福祉」でなく、「ふくし」と表記します。言い換えれば、神のいのちが宿る希望としあわせという意味をもたせています。

イムヌエル総合伝道団「イムヌエル教報 860 号」(2018.3)

第19・20次総会期の総括と第21次総会の展望

広報 川嶋直行

2月5日(月)～6日(火) 本部会議室で定例の教団運営委員会が開かれました。冒頭、藤本満代表によりイザヤ書41章3～4節が開かれ「初めであり、終わりとともにある方の導きを求めよう」とお勧めがありました。総会・年会を前に、総会・年会資料に目を通しながら、これまでの歩みと今後の方向性について、確認と討議がなされました。

総会・年会資料にも記されていることですが、目にする機会のない方もおられますので、重要と思われる点をご紹介します。全般報告の最後に「インマヌエルらしさを忘れずに、偏らず、福音に生きる」とあります。聖と宣の伝統に堅く根ざし、時代に柔軟に即して行くということでしょう。第19次・第20次総会期において「合議的監督制」の成熟・発展を目指し、牧師と信徒の協働体制が整えられて来ました。具体的には、厚生委員会、財務委員会での信徒の役割の増大、信徒局の創設、信徒主体のBTC後援会のスタート等があります。今後、牧師がいくつかの教会を巡回しながら、信徒主体の教会運営がなされて行くケースが増えることが予想され、国内と世界、教団間、地域教会等、様々なレベルにおいて、共同教会を意識しての「協力体制」構築がますます必要となることが展望されます。

インマヌエルの牧師・教職を目指す方々のために「奨学金代弁済制度」が提案され、議決されました。これは、聖宣神学院入学者が、学生支援機構等から借りた奨学金を教団が代弁済し、一定期間インマヌエルの教職として奉仕した場合、返済が免除されるという制度です。奨学金返済が、聖宣神学院の入学の妨げとなることを軽減する目的があります。

聖宣神学院構内にある旧女子寮をリフォームし、研修施設とする提案については、予算三千万～三千五百万(内、後援会が二千万円支援)で基本的な方向性は承認されました。来年の年会をBTCで開催するという案も出されていますが、防湿対策工事の正確な見積と予算確保、定期的な管理・メンテナンスの人材確保の見通しをしっかりと付けるべきとの意見も出され、次の教団運営委員会で継続検討することになりました。OCC本部機能の事も含め、今後の方向性を決める大きな課題ですので、お祈りをお願い致します。

教区の現状から教団の将来を考える

「私には夢があります」

「教会が、滅びゆく魂を重荷として、その地での使命を果たし続けること。

たとえ牧師が不在でも、生き生きと」

武毛教区長 田中 多恵子

● 現状と見通し

武毛教区には9つの教会があります。礼拝の平均出席者は6～20名です。各教会間は車で40分から2時間半の距離。武毛教区の信徒も高齢化しています。その高齢の信徒が中心になって奉仕します。聖会、信徒大会、キャンプには、若い人や子どもたちが元気に参加し、次世代育成の真っ最中です。

この数年に、2教会の牧師が隠退し、兼牧となりました。これから数年の間に3教会の牧師が隠退します。9教会の内、5教会に牧師が不在になるかもしれません。4教会の牧師で、9教会を牧会する？また牧師のだれかが転任したら、3～4人で9つの教会を？

教団では牧師が少ないのが現状です。礼拝出席者が20名を超える教会に、牧師が住んでいない教会がある程です。

● チャレンジ

おりしも、北関東ブロック教職セミナーが行われました。講師は、地方伝道を考えるシンポジウム主催の山口勝政牧師。先生は「行って、すべての国民を弟子とするのが聖書のメッセージです。それなのに、全国的に地方の教会が閉鎖に向かっているのは、聖書に逆行している。このまま地方の教会が消えていくなら、やがて都市の教会も消えてしまう」と危惧しておられました。さらに「地方の教会では、喜んで福音に生きている牧師、信徒がいる。教会の価値は人数や経済力では測られない。都市の教会がサーバンツリーダーとなって、そのような教会に協力しよう。そして、福音の神髄を学ぼう」と提案されました。

● 牧師の意識改革

数人で9つの教会を牧会するとしたら、工夫と意識改革が必要になります。複数の教会を牧会できるように、立地条件の良い場所に牧師館を用意します。9教会で数件の家を借りても良いでしょう。そこに牧師が住んで、9つの教会を巡回します。初代教会と重なる姿です。当時の教師は、皆巡回していたのですから。もちろん、祈りの日本ホーリネス教団。献身者が起こされるようにとの祈りは絶やしません。

● 信徒が教会の未来を見る

これまで武毛教区内の教会では、伝道牧会など、ほとんどの奉仕を牧師が担ってきました。それが最近変化しています。一部の教会では、信徒が主体的に奉仕を担うようになりました。週報を作り、土曜日に集まって主日礼拝の準備をしたり----。なんと、牧師が不在になった時から変わったのです。教会は変わることができるのです。

これからは、各教会の信徒が自分で教会の未来を思い描きましょう。10年後を予想し教会の姿を考えます。教会を存続、合同、閉鎖----。存続するとしたら、どうするのかを考えます。普段の生活に加えて、さらに教会でご奉仕するのですから、なるべく身軽な姿を目指します。

- ① 毎週の礼拝説教、祈祷会、週報はどうしたらよいでしょうか。
- ② 伝道第一の日本ホーリネス教団。信徒が中心で、どのように伝道するのでしょうか。
- ③ メンテナンスの必要な会堂や庭を、どうしたらよいでしょうか。

● 各教会でできること

こんなことができるかもしれません。

- ① CDで説教を聞くことが多いと思います。可能なら説教集を朗読するのはいかがでしょうか。さらに、信徒コースの通信教育で学び、信徒が奨励をできるようになることも目指します。
- ② 週報は、プログラムだけにします。または作らなくてもいいかもしれません。集会出席者、説教箇所を記録するだけで良いでしょう。

- ③ 信徒それぞれが伝道するのです。毎月きぼうを一人3枚どこかに配ってみてはどうでしょうか。
- ④ メンテナンスの必要な会堂や庭を、思いきって手放す。借家、ビルの一室などを日曜日だけ借りる。牧師が住まない教会堂なら、十坪程度の建物を、建てれば良いかもしれません。

● 教会、教区にお願いです

もし、地方の教会に重荷を持ってくださる教会、教区がありましたら、お願いします。地方の教会の信徒を、礼拝・祈祷会に招いてください。そして地方の教会の証と実状をお話させてください。耳を傾けてくださり、地方教会に寄り添ってくださるなら、私たちは、どれだけ心強いでしょう。ここから地方の教会は励まされ、自分たちで考え、何かを始めます。主体性を持ち続けられるようにご協力くだされば感謝です。

大胆なことを書きましたが、これが教区の現状なのです。「教会が、滅びゆく魂を重荷として、その地での使命を果たし続けること。信徒も牧師も生き生きと」。お祈りください。「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ28：20）

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.743」（2017.8）

全国の教会学校を訪ねて Trip No.1

[全国的に、教会学校の衰退が叫ばれていますが、中には今も元気で、ユニークな教会学校があります。シリーズで紹介していきます。]

豊川基督教会の巻

牧師 城市 篤

私たちの教会では2012年より、毎週土曜日の午後2時から4時くらいまで、教会学校をやっています。開始当初は教会学校に参加するお友達がおらず、妻と2人でお祈りと賛美をする時間となっておりました。近所の小学校での朝の読み聞かせボランティアを通して、仲良くなったお友達が少しずつ噂を聞きつけ、教会に遊びにくるようになりました。一緒に遊びつつ、少しずつ神様の事を伝え、ようやく最近になって信仰告白をし、洗礼の決心をするお友達も起こされてきました。私たちの教会学校は、まだまだ開拓状態ではありますが、神様の恵みとあわれみによって毎週礼拝をささげています。

普段の教会学校の礼拝では、「神様の前でいつも喜んで、楽しく、元気に、自分らしく礼拝をささげよう！」をモットーに礼拝をささげています。

◇ 礼拝のプログラムとしては

● まず早くきた人から自由時間です。（テレビゲームをしたり、マンガを読んだり、宿題をやったり、折り紙、ぬりえ、おもちゃなどで遊ぶ、ゴロゴロする、など。）

各自、他の人の迷惑にならない限りで自由に過ごします。

● スタート

2時になったら、お祈りをして礼拝タイムです。

● アイスブレイク

みんなで体を使ったゲームをやります（おにごっこ系、かくれんぼ系、ボールや風船を使った系、その他）。30分ぐらいやって心と体をほぐします。

● 賛美タイム

声と体を使って、神様を一杯賛美します。奏楽にチャレンジしたい人は、ちょっと練習してから、交代で奏楽します。人気なのはカホン、タンバリンなどです。少々リズムが変でも気にしません。賛美することは力になります。

● 御言葉タイム

パワーポイントや紙芝居、DVDなどの視覚教材を使い、聖書の御言葉に思いをめぐらせながら、身近なことに適応することをみんなで考えます。

お祈りして欲しいこと、最近の出来事などを分かち合います。

● 最後にお祈りして礼拝終了。そして、お待ちかねのおやつの時間です。

● その後は、また自由時間となります。夕方まで過ごし、ぼちぼち家に帰って行きます。

生まれたての赤ちゃんから、中学生までが一緒になって教会学校に集っています。今後の課題としては、教会学校で育った中学生たちが、スタッフとして後輩たちと接することを通して、人間的にも信仰的にも成長してほしいことです。さらに、教会内だけでなく、それぞれの家庭や学校、友人関係の中でも、「世の光、地の塩」として良い影響を与える者へとなくなっていったら良いなあ、と思っている今日この頃です。覚えてお祈りくだされば幸いです。

**2017年度 会計報告と献金者名
(2017年4月～2018年3月)**

昨年度も皆様の尊い献金により、JMRの活動をお支え下さり心より感謝申し上げます。

ここに感謝を持って、2017年度のご報告をさせていただきます。2018年度も引き続き、JMRが日本の宣教のために用いられていきますよう、ご支援、ご加禱いただけますと幸いです。皆様の上にも主の限りない祝福をお祈り申し上げます。

【収入】

前年度繰越金	130,097	
一般賛助会員献金	96,000	
特別賛助会員献金	315,000	
その他	218,432	(「CD版データブック売上」)
収入合計	759,529	

【支出】

事務・消耗品	170,268	(CD作成費・デザイン費、マップシステム作成費他)
通信費	18,041	
印刷費	15,155	
会議費	0	
交通費	100,218	
諸会費	5,000	
書籍費	13,764	
広告代	45,600	
支出合計	368,046	

【次年度繰越金】 391,483



あとがき

近年にない酷暑と言われた夏も、そろそろ終わりを迎えたかのように、早や9月になり吹く風にいくらか秋の気配が感じられる季節となりました。しかし、連続して日本列島を襲う台風や北海道胆振東部で発生した地震等により、各地で被害が発生していますが、皆様はお変わりないでしょうか。ここに「日本宣教ニュース」第13号を皆様にお届けすることができることを感謝致します。

今回は、7月に「未信者に開かれたキリスト教葬制文化を目指して」をテーマとして行われたTCUの「第一回実践神学講習会」のレポートを掲載しました。それは、「今後、日本人がどのような葬儀を行っていくのかは、日本の宗教において重要な問題であり、そこにキリスト教がいかに関わっていくかは、日本宣教の重要な課題」であり、「キリスト教会が地域に開かれた教会として、未信者に対してもその公共的・福祉的な働き（ディアコニア）の一環として葬儀を執り行う責務がある」と考えるからです。そのためには、全ての人に開かれた『キリスト教葬制文化』の確立を、キリスト教会全体として取り組んでいく必要があります。TCUとしても、引き続き「キリスト教葬制文化研究会」を発足させ、葬儀業界とも連携して、キリスト教葬祭ディレクターの養成等、具体的な取り組みを行っていくこととしています。

今回も、中外日報から「お寺は誰のものか」という記事を転載しました。お寺を教会、檀家を教会員に置き換えれば、まさにキリスト教会が抱えている問題と全く一緒であると言えます。

しかし、キリスト教会においては、「危機感」がないのは、教会を私物化して支配する権威主義的な牧師の方でしょうか、それとも改革をしようとする足を引っ張る世的な信徒の方でしょうか。個人的には、前者の事例を多く耳にしますが、皆さまの周りではいかがでしょうか。

日本聖公会が掲げる「宣教の5指標」(5 Marks of Mission)は、世界教会協議会(WCC)の宣教理解に基づくもので、福音派がローザンヌ誓約で打ち出した宣教理解と軌を一にするものでもあり、私たちも共有すべき目標のように思います。

最後に、「現在どの教区、教会も、教勢の低落、財政状況の逼迫等に苦しんでいる」という「危機感」を背景に西原司祭が言われた言葉を、少し長い引用になりますが、再掲させていただきます。

「私たちの宣教の原点は、実はきわめてシンプルなものである。信徒への牧会はもちろん、教会のあるパリッシュ全体、地域全体に対する牧会的働きを、ていねいに実践していくことに尽きると言っても過言ではない。その地にある、かすかな声に耳を傾けていくこと、声を出せない人々の「声」となっていくこと。この世界、社会、絶望の内にある人々に対して、神の祝福、<いのち>の喜びを、語り続けること。パリッシュにある課題、そしてまたこの世界にある課題に、教会として、ていねいに取り組むこと、私たちの教会が、一人ひとりを抱きしめていくこと、温もりを与えていくこと以外にない。」

(初穂)

献金者名 (2018年6月～2018年8月)

◎ 尊いご支援に、心から感謝申し上げます。(敬称略)

臼井信博、崎山 清、島田治夫、松原正幸、柳下 弘、本郷台キリスト教会、清瀬グレースチャペル

2018

JEA宣教フォーラム @東海

Mission Forum in Tokai area



「東海を知る」



東海地域で築きあげられてきた
「ゆるやかな宣教協力」から
多くのことを
学ぶことができます。



2018年9月24日(月・祝) 13:00～9月25日(火) 12:30

会場 ● 在日大韓基督教会名古屋教会 with キリスト聖書神学校 (CBI)
〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅2-39-11 TEL:052-541-1980

登録料 ● 両日割: 3,000円/1日のみ: 2,000円 (※当日現金支払、席上献金あり)

申し込み ● JEAホームページ <https://jeanet.org/> から **9/10締切**

プログラム P r o g r a m

24日(月)

- 13:00-13:30 オープニング
- 13:30-14:00 東海地域の歴史・東海地域宣教協力の歴史
- 14:00-18:00 パネルディスカッション
- 17:30-20:30 Mission&U(若者セッション) 場所:CBI
※青年のみ参加可能、詳細は別のチラシをご覧ください。
- 18:00～ 自由時間(大須、名古屋めしツアーなど)

25日(火)

- 9:00-9:30 JEA宣教委員会報告
- 9:30-10:45 分科会(下部に記載)
- 10:45-11:00 休憩
- 11:00-12:00 全体報告
- 12:00-12:30 閉会礼拝

※食事や宿泊は各自でお願いします。

○25日(火)分科会項目

- ① 聖書信仰の成熟を求めて ② 教会と地域を結ぶ新たな宣教モデル～「ふくし」を通して地域に「見える化」する～
- ③ 教会と「国家」 ④ 持続可能な社会の構築 ⑤ ディアスポラ宣教協力
- ⑥ ビジネス宣教協力の次世代構想～共創による文脈形成を支える宣教協力～
- ⑦ 痛みを担い合う教会～東日本大震災からの宿題 ⑧ 青年宣教

※分科会はウェブフォームで選択してください。

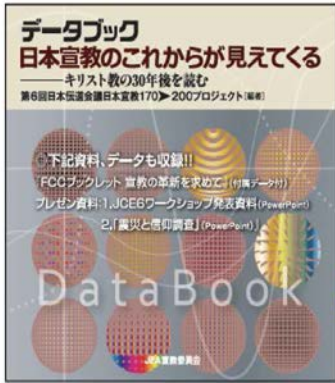
主催: JEA 宣教委員会、JEA 宣教フォーラム@東海・実行委員会

お問い合わせ: 日本福音同盟 (JEA) 総務局: 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル内

TEL: 03-3295-1765 e-mail: adminoffice@jeanet.org

刊行物紹介

データブック 『日本宣教のこれからが見えてくる』 CD-ROM 版（好評発売中）



グラフや図がカラー
表も見やすい
有用なデータが満載
プレゼン資料も収録
定価 1,000 円+税

【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」-キリスト教の30年後を読む』
- 『データブック FCCブックレット 宣教の革新を求めて』(付属データ付)
- プレゼン資料: 1. JCE6 ワークショップ発表資料 (PowerPoint)
2. 「震災と信仰調査」(PowerPoint)』

【編著】第6回日本伝道会議「日本宣教170▶200プロジェクト」
東京基督教大学国際宣教センター 日本宣教リサーチ
【発行】日本福音同盟 (JEA) 宣教委員会

キリスト教葬儀研究会

日本宣教におけるキリスト教葬儀 開かれたキリスト教葬制文化を目指して

巻頭言	倉沢正則
一般葬儀とキリスト教葬儀の現状	柴田初男
日本の葬送儀礼の宗教的背景	大和昌平
葬儀論から日本宣教論へ	稲垣久和
近代日本における死者儀礼と教会	篠原基章
—キリスト教葬制文化を形成していくために—	
未信者にも開かれたキリスト教葬式を求めて	倉沢正則
キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ	清野勝男子
付記「キリスト教葬儀に関するアンケート調査」報告書	日本宣教リサーチ まとめ 大和昌平
コラム 1~5 終活セミナー開催の理由他	野田和裕

NO.10

February 2018



東京基督教大学 国際宣教センター

定価 1,000 円+税

好評発売中

【お申込み・お問合せ】

E-mail: fcc@tci.ac.jp FAX: 0476-31-5521

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR)は、この4月で発足から5年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス (CIS) の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき、活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2018年度は、JCE6「日本宣教170➤200プロジェクト」の流れを引き継ぎ、新たにJEA(日本福音同盟)宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「教会の再生」「次世代育成」「地域宣教ネットワークの構築」に取り組んでいきます。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

JMR の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (詳細篇) のご提供
- (2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (概要編) のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金(献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金(献金)額の約 50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131(TCI 募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。
(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学学長)
日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男